

今、今更に型紙にて放哉を想う

日下部雅生 作品展

京都 堺町画廊

二〇二三年十一月一日(火)～六日(日)

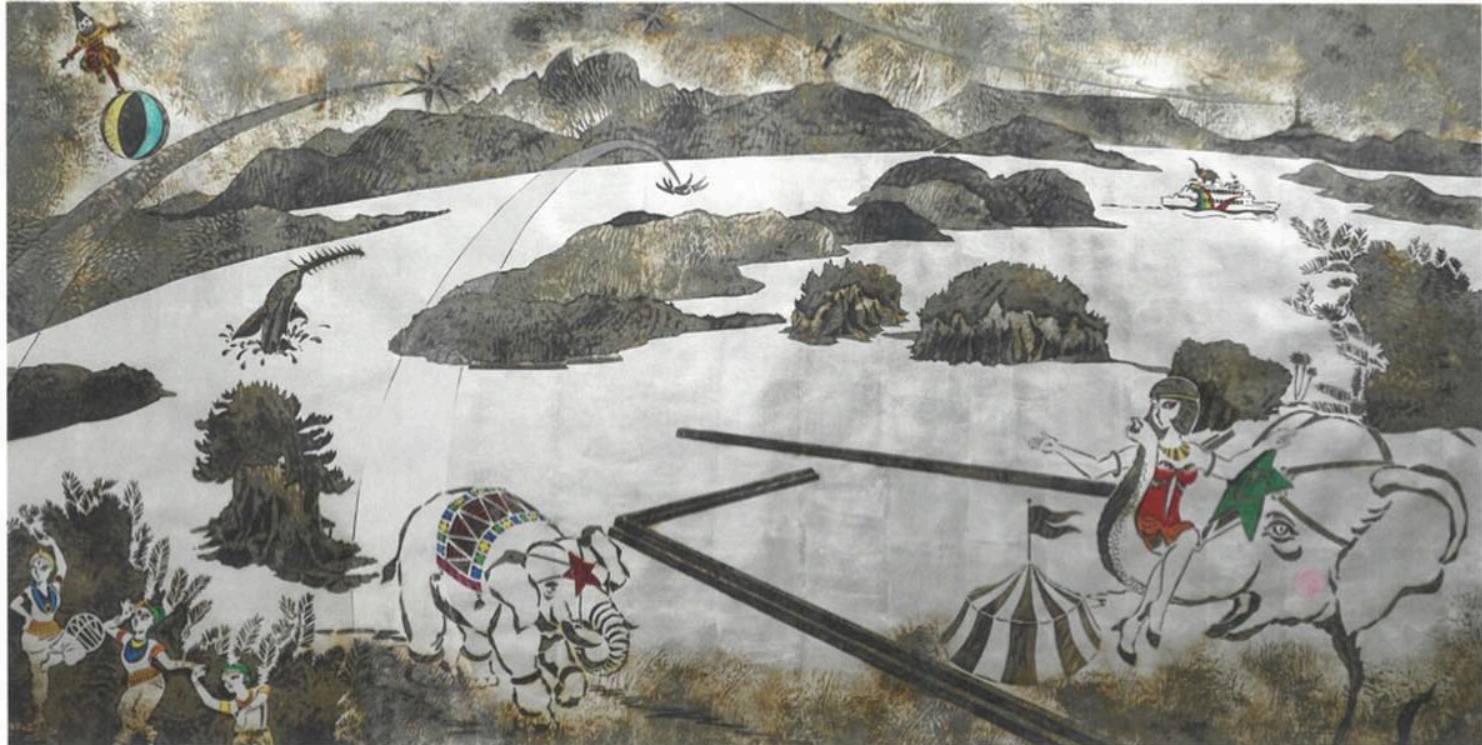
十二時～午後七時(最終日 午後五時まで)

ギャラリートーク「一人で暮れている放哉」

ゲスト：廣瀬千紗子

日時：11月2日(水) 18:30～19:30

入場料無料、申込み不要です。



型羅変銀箔彩色額『海も暮れきる』

今・今更に放哉を想う

日下部雅生

私の三世代前の血縁に尾崎放哉という俳人がいた。高学歴のエリートである事を鼻にかけ、そのくせその同窓生らを嫌う。酒にも金にも人にも、そして自身にもだらしがない。かつて作家吉村昭が評伝執筆のため放哉終焉の地、小豆島取材に訪れた時、放哉を知る人々は“何であんな人間の小説を書くのか？”と口を揃えたという。彼の句を愛でる人は多い。しかし私たちその血を引く者はいつも、狂気の血を受け継いでいることへの不安に苛まれる。

私も何かと避けてきた放哉であったが、過日生まれて初めての大病を得て、不安な時を過ごす経験をしたことから、長く肋膜炎に苛まれた彼の不安や不満に、今までとは違った感覚を覚えた。毎夜訪れる発熱や胸の苦しきの中、彼の視線を辿ってみようと思ったのである。



咳をしても一人
足のうら洗えば白くなる
いれものがない両手でうける
障子あけて置く 海も暮れきる
こんなよい月を一人で見て寝る
一人の道が暮れて来た
春の山のうしろから煙が出だした（辞世）

尾崎放哉（おざきほうさい）

俳人。1885年鳥取県吉方町（現鳥取市）に生まれる。本名秀雄。中学時代より句作を始める。1902年第一高等学校入学。荻原井泉水のおこした一高俳句会に入る。東京帝国大学法科に入学後、芳哉の号で高浜虚子選の『国民新聞』俳句欄や『ホトトギス』に投句。1907年ごろ放哉の号となる。1909年大学卒業。東洋生命保険会社入社するもその後酒癖のため転職、転地を重ねる。1915年末より井泉水の『層雲』に投句。妻と別れ京都の一燈園に入り、のち諸方の寺の寺男となった。1925年夏、小豆島の西光寺奥の院の南郷庵に入り独居無言、句作三昧の境に入ったが1年足らずで病没した。句集『大空』（1926）があり、口語自由律の句に特色を発揮した。



終焉の地 小豆島南郷庵跡に立つ『尾崎放哉記念館』

今・今更に型紙にて放哉を想う

日下部雅生 作品展

2022年
11月1日（火）～6日（日）
12:00～19:00（最終日～17:00）

堺町画廊

京都市中京区堺町通御池下ルTel. 075-213-3636
URL: <http://sakaimachi-garow.com>
information@sakaimachi-garow.com

